

クローズアップ! 就職指導

低学年次からの就職観の育成 1年次・2年次

学校と実習先、 2つの学びで 就職観を育成

高卒就職の指導では、1・2年次に就職観を育成することが不可欠だ。社会で働くにあたって、どのような力が求められるのかを早期に知っておくことは、高校での学びを充実させるという点でも重要である。

就職観の育成の指導モデルの1つに、学校での座学と企業での実習を組み合わせた「日本版デュアルシステム」がある。2004年度に、ニート・フリーター問題、若年層の離職率の高さなどを背景として文部科学省が始めた取り組みで、普通科高校で唯一対象となったのが、大阪府立布施北高校だ。現在、同校は、エンパワメントスクール（*1）に改編。「日本版デュアルシステム」の経験を土台に、1年次に2日間のインターンシップ、2・3年次には週に1回、地元企業等での職場体験実習（以下、デュアル実習）を行っている。総合学科部長の川本祥也先生、進路指導部長の渡邊大地先生に話を聞いた。

実践事例

週1回の「出勤」で、働くための力を育む 大阪府立布施北高校

年間20日間の職場体験 「デュアル実習」

布施北高校では、地元企業等の協力を得て、「エンパワメントタイム（*2）」の授業内で、1年次は、全生徒が2日間のインターンシップに、2・3年次は、選択科目として履修する生徒が毎週1回6時間のデュアル実習に取り組み（図1）。

2・3年次のデュアル実習の日は、生徒は実習先の勤務時間に合わせて「出勤」する。教師は1人あたり10社程度を受け持ち、実習日は担当の実習先を巡回して、生徒の様子を確認。実習先の担当者から聞き取った実習内容や生徒の業務状況を、担任などと共有する。

年間20日程度の職場体験となるデュアル実習だが、そのねらいは、社会で働くために必要な基礎力を育成することだと、川本先生は説明する。

「毎朝決まった時間に出勤する、職場の同僚や取引先にきちんと挨拶をする、敬語を正しく使うな

図1 教育課程 3年間を通して行われるエンパワメントタイム

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
1年	現代の国語		基礎数学				シンヨウI		体育	保健	音楽I 美術I 書道I	家庭基礎	情報I	エンパワメントタイム																10分学習	
2年	言語文化	歴史総合	公共				英語		体育	保健	選択科目			エンパワメントタイム (デュアル実習選択者)																	LHR
3年	論理国語	地理総合	数学II						体育		選択科目			エンパワメントタイム (デュアル実習選択者)																	

※学校資料を基に編集部で作成。

*1 大阪府教育庁が指定する総合学科高校。「モジュール授業」や「エンパワメントタイム」などの特徴的な授業を通じて、つまづいているところを徹底的に学び直し、社会で活躍するために必要な力を身につけることを目指す学校。

*2 エンパワメントスクールにおける、「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「選択科目の一部」から成る授業。グループ学習形式や参加体験型学習形式の授業の中で、「正解が1つではない問い」について考え、話し合うことを通じて、思考力や表現力、コミュニケーション力、チームワーク力を養成するとともに、進路観の醸成も図る。

図2 デュアル実習日誌 (表面)

第()回 実習		実習日	月	日 ()	気温	℃
デュアル実習日誌		出席状況	出席	欠席	遅刻	早退
担当教員名		先生	出勤時刻	:	退勤時刻	:
時 間	実習内容	具体的な仕事内容・指示されたこと 等				
午前		生徒が実習の度に提出する日誌。 裏面には、「学んだこと、気づいたこと、疑問に思ったこと」「うまくいったこと、うまくいかなかったこと」などを生徒が書く欄と、実習先の担当者と担当教師のコメント記入欄がある。				
午後						
本日の目標						
【自己評価】 A:よくできた B:だいたいできた C:不十分だった						
1	「デュアル実習 三か条」を守って取り組むことができた	A	B	C		
2	体調管理を含め、心身ともに万全の準備をして臨むことができた	A	B	C		
3	「今何をすべきか」を常に考えながら行動することができた	A	B	C		
4	誰とでも積極的にコミュニケーションをとることができた	A	B	C		
5	「なりたい自分」や進路目標を意識して取り組むことができた	A	B	C		

※学校資料を基に編集部で作成。

首席・総合学科部長

川本祥也 かむもと・よしや

教職歴 12 年。同校に赴任して 8 年目。

進路指導部長

渡邊大地 わたなべ・だいち

教職歴 11 年。同校に赴任して 6 年目。

学校概要

- ◎設立 1978 (昭和 53) 年
- ◎形態 全日制/総合学科/共学
- ◎生徒数 1 学年 180 ~ 210 人
- ◎2021 年度進路実績 (現役のみ)
4 年制大は、大阪観光大、大阪経済法科大、大阪人間科学大、摂南大などに延べ 11 人が合格。短大・専門学校進学 50 人。就職 73 人。

毎週1回6時間のデュアル実習を選択する生徒に、どのような支援をしているのか、総合学科部長の川本先生が、さらに詳しく紹介。

VIEWnext ONLINE ▶▶▶▶



ど、社会人としてできて当然のことを、実習を通して生徒に理解させ、身につけさせます。また、実習で学んだことを振り返り、自分が改善すべき点を見つけ、それを次の実習までに改善することも重視しています」

デュアル実習を始めるにあたっては、事前に学校から実習先に、生徒の性格や進路目標、生徒を見守る上で知っておいてほしい情報を伝えている。「普段の高校生活で頑張っていることはもちろん、『強い言い方をされるのが苦手な生徒なので、こんな伝え方をしていただけませんか』などと、生徒に合わせた指導を実習先にお願ひしています。毎回必ず巡回するのは、生徒の様子だけでなく、実習先が困っていることはないかを聞くことで、実習先と良好な関係性を保つためでもあります」(川本先生)

生徒と実習先の双方の状況を把握し、問題があれば、次週の実習までには改善していると、川本先生は言う。

職場体験を支える エンパワメントタイムでの対話

就職観の育成において、インターンシップやデュアル実習と並んで重視しているのが、エンパワメントタイムでの生徒主体で進める対話の時間だ。「なぜ、私たちは働くのかや、自分の強み・弱み、社会問題などをテーマにグループで話し合ったり、自分の意見を作文にまとめたりします。デュアル実習の選択者は、この時間に、実習の際に記入した実習日誌(図2)を使って、生徒同士で実習についての情報交換や振り返りをします。エンパワメントタイムでの学びが、インターンシップやデュアル実習をよりよいものになっています」(川本先生)

多くの生徒は、デュアル実習の経験を踏まえて希望職種を考えていると、渡邊先生は語る。「3 年次に行く希望職種の検討では、生徒は、希望する職業が自分に向いているかどうか、デュアル

実習の経験を基に判断しています。また、低学年次から学校外の大人とかわる経験を多くしたこと、3 年次の職場見学や企業との面接時に、堂々と振る舞える生徒が多いように思います」

デュアルシステム導入前は、同校の卒業時の進路未定者は約 48% だったが、現在は、高校幹旋による就職を希望している生徒のほぼ全員の進路先が決定するようになった。そのような成果を上げているデュアル実習だが、すべての生徒に必須の活動とする必要はないと、渡邊先生は考えている。

「生徒の半数程度は、デュアル実習を選択せず、資格試験対策の授業などを選択します。その理由は、目指す進路につながる経験はデュアル実習ではできないから、進学に向けて勉強を頑張りたいからなど、いずれも納得できるものです。エンパワメントタイムで自己理解を深め、進路を考えたい生徒が、自分に必要だと判断し、主体的に参加するからこそ、デュアル実習での学びが豊かになるのです」